

アプレイウスによる哲学のすすめ

小島 和男

序

サイモン・スウェインはアプレイウスについて次のように語っている。

アプレイウスは芸人であり遊び人であり、利口ではあったが底の浅い人間だった。裕福な未亡人に色目を使ったので、当然訴えられたわけだが、裁判官とアプレイウス自身との間の学問を通じての個人的なつながりをもとに、大胆にも無罪を主張した（『弁明』）。アプレイウスはうぬぼれていたのも、自分を誇示する演説の中のハイライトを集めて四巻本を出版した（『フロリダ』）。知的な虚栄心故に彼は、『ソクラテスの神について』で陳腐な説明をした。最終的にアプレイウスは、才能のはけ口を、ロバになった男の人生についての喜劇に見つけたが（『黄金のロバ』）、その話の筋は作者不詳の『ロバ』というギリシア語の作品から（おそらく）盗用したものである。『フロリダ』という演説集は、一見、ギリシアの弁論家やソフィストたちが生活のために見せつけなければならなかった弁舌の才能を、ある意味並べて見せてくれているようにも見える。しかし、アプレイウスは実際に行っていない演説は書かなかったし、（偽の）歴史的な弁論も書いていない。弁論術の練習本も書いていないし、弟子だって一人も知られていない。もし、アプレイウスの著作のスタイルが「ソフィスト的」であるなら、つまりそれは、響きが良く、明快で、古風な語を使い、あいまいで、仰々しいということだが、そうだとしたら結局なんだというのか。とにかく、彼は「哲学者」であると自称している。おそらく我々は彼を「インテリ」とだけ呼ぶべきである¹。

このようなアプレイウス評は真新しいものではない。ヘイトは「アプレイウスは哲学について著述したが、際立ってプラトニストというわけではなかった²」と言い、ディロン

¹ Swain (2004), p.12. なお、アプレイウスが「プラトン学派の哲学者 (philosophus Platonicus)」と、はっきりと自称しているのは、『命題について』という作品においてであるが、この作品の真偽は疑われている。水落 (2006) に詳しく、水落は真作の可能性が高いとみている。また、モレッシーニは『命題について』はアプレイウスの作ではないと論じている (Moreschini (2015), pp. 204-218)。

² Haight (1963), p.76.

は「アプレイウス自身はそうは思っていないが、アプレイウスは哲学者ではないということとは念頭に置いておこう。従って、もし彼に価値があるとしてもそれは、どの程度我々に典拠を一つでも複数でも伝えてくれるかどうかにかかっている³」と言っている。また、テータムも「アプレイウス本人が知らず知らずのうちに哲学者の真の概念を伝えていくという場合はあるにしても、哲学をするうえでアプレイウスに取り組む人間なんていないだろう⁴」と言う。

にもかかわらず、20世紀末から盛んにアプレイウスが研究されるようになってくる。とはいえやはりそれはアプレイウスを哲学者としてではなく、ソフィストとしてあつかう研究であり、所謂「第2次ソフィスト思潮」の研究が盛んにおこなわれたが故のことであった。ハリソンは、「アプレイウスの業績は、ローマ支配下の2世紀のアフリカでインテリ、ソフィストとして活動したことのみならず、同時期のより大きなギリシア第2次ソフィスト思潮の枠組みの中にある⁵」と語っている。そしてこのハリソンに反論したのが、冒頭のスウェインであり、彼はアプレイウスをソフィストとして理解することにも反対なのである。

ただし、哲学者アプレイウスへの肯定的な意見もある。例えばハーベルミルは、アプレイウスの『ソクラテスの神について』についての論文の冒頭でこう語っている。

ルネサンスが訪れて以来久しく、『ソクラテスの神について』の名声は、同じ作者の最高傑作『黄金のロバ』の名声の陰に隠れてしまっている。このアフリカ人の奇妙なレトリックの才能の成果である他のマイナーな成果と同様に⁶、『弁明』というこの公の場での長い説諭はアプレイウスの弁論家としての特別な才能を、『ソクラテスの神について』は脈々と受け継がれたプラトン主義について書く哲学作家としての特別な才能を、十分に証明している。『ソクラテスの神について』は、ミドルプラトニストの哲学の重要なテキストの一つとして、壮麗で、はっきりとした説諭という性質を持つ演説の一篇として研究するにふさわしい。タイトルからはすぐには伝わらないかもしれないが、我々に伝わっているキリスト教的ではないダイモン論の、非常に魅力的なオリジナリティにあふれる論が核として含まれている⁷。

フレッチャーは、アプレイウスが哲学者として否定的に評価されている原因を探っている。フレッチャーによれば、その原因の一端は、『黄金のロバ』がアプレイウスの中心的な作品であるという通念に、また、アプレイウスの作品を「文学的」かつ「修辭的」な作

³ Dillon (1977), p.311.

⁴ Tatum (1979), p.105.

⁵ Harrison (2000), p.v.

⁶ 『フロリダ』のこと。

⁷ Habermehl (1996), p.117.

品（『黄金のロバ』、『弁明』、『フロリダ』）と「哲学的」かつ「プラトンの」な作品（『ソクラテスの神について』、『プラトンとその教説』、『宇宙論』）に区分してしまったことにある。このように作品群をはっきりと二つに分けてしまえば、アプレイウスの理解は、プラトニズムにちょっと手を出してみた作家か、小説の創作に手を出してみたプラトニストになってしまうだけだとフレッチャーは言う。そして彼は、アプレイウスのプラトニストとしての固有性を正当に評価しようとし、その端緒に、ウォルター・ペーターの『享楽主義者マリウス』内に登場人物として描かれているアプレイウス像を持っている⁸。

更に、モレッシーニは、フレッチャーに大いに共感しつつ⁹、アプレイウスの著作の執筆順を明らかにしながら¹⁰、アプレイウスは、正にソフィストであると同時に哲学者であったのであり、それが彼の生きた時代には可能であったと論じている¹¹。

さて、本発表では、『ソクラテスの神について』に焦点を絞り、その作品でアプレイウスが何をしてきたのかを明らかにしたい。数少ない肯定的な意見に組しながら。端的に言えば、アプレイウスは、プラトンをいわば「研究」して、その上で「哲学のすすめ」をしていたのである。

1 「哲学のすすめ」とダイモン論の関係

この『ソクラテスの神について』という作品の目的に関しては、現代の研究者たちの意見は分れる。先にも紹介したハーベルミルは、こう考えている。「非常に魅力的なオリジナリティにあふれる¹²」ダイモン論がそこにはあり、アプレイウスは「純粋な哲学的志向以上に宗教的な意向を優先する¹³」ミドルプラトニズムの神学に影響を受けており、「ギリシア哲学とローマ宗教の用語を一致させようとしている¹⁴」のだと。ロスカンもまた、ダイモン論を語るというところにアプレイウスの目的を見ているようだ。彼らは、ソクラテスのダイモンを特別に扱っているという点に注目はするが、テュロスのマクシモスの主張を上回りはしておらず¹⁵、マクシモスが素晴らしいペテン師として真実の探求をするふりをしながら説得と自己主張を目的としたのと同様に¹⁶、アプレイウスも「自称プラトン

⁸ Fletcher (2014), ch. 1.

⁹ Moreschini (2015), p. 27, fn. 54.

¹⁰ モレッシーニは、『Apologia』が最初期の作品であり、『De Platone et eius dogmate』と『De Mundo』は、晩年の作品だとしている。Moreschini (2015), p. 200-3.

¹¹ Moreschini (2015), p. 27.

¹² Habermehl (1996), p.117.

¹³ Habermehl (1996), p.134.

¹⁴ Habermehl (1996), p.134.

¹⁵ Roskam (2010), p.93.

¹⁶ Roskam (2010), p.99.

主義哲学者としての自己主張と哲学教育¹⁷」をしたのだと解釈している。

ハリソンは、最後に「哲学のすすめ」の部分があることが独自であると評価しているが、ダイモン論とはつながりがないと断じている。

また、アプレイウスのダイモンの扱いで独自のなのは最後の部分で、そこで彼は聴衆に向かって自己内省と哲学の善き生へ振り返るよう勧めている。主題的にこれは標準的な「哲学のすすめ」、プロトレプティコス・ロゴスであり、プラトンの『エウテュデモス』やアリストテレスの失われた『プロトレプティコス』、キケロの失われた『ホルテンシウス』に遡る伝統にしたがったものである。表現的には、正にセネカの『道徳書簡集』を思い起こさせるような痛烈な非難というやり方を取っている。それと『ソクラテスの神について』の他の部分との関係はどうにも希薄である。アプレイウスは、すべての人が従うべき哲学的徳の模範としてソクラテスを提示することで結び付けているのだが、その部分はダイモン論と何の関係もなく、通俗的な倫理学の一般的でよく知られたトピックを大幅に薄めたものに過ぎない¹⁸。

ハリソンはテュロスのマクシモスの *Dialexeis* 8, 9 との類似も示唆している。どうしてもハリソンはアプレイウスがマクシモスを下敷きに『ソクラテスの神について』を書いたとしたいようだが、年代的にそれはままたならず、二人には同一の元ネタとなる作品があったという推測に到る¹⁹。

しかし、フレッチャーはハリソンとは対照的に、アプレイウスの『ソクラテスの神について』は、マクシモスの *Dialexeis* 8, 9 とともに、プルタルコスの『ソクラテスのダイモニオンについて』とも、テーマこそ同じではあるが、鍵となる三つの点で異なっているとし、プラトン主義者として高く評価している。その三つとは、プラトンのダイモンを語る上ではっきりとプラトン本人を登場させているということ、後半でソクラテスの話が紹介される前に前半部分でダイモン論が語られているということ、最後の「哲学のすすめ」の部分にあるアプレイウス本人の補足、の三つである²⁰。

それでは実際に作品を見てみたい。まずは全体の構造から見てみよう。この『ソクラテスの神について』は全部で 24 の節に分かれている。それを内容でまとめると以下のように五つの章が出来ると思われる。

¹⁷ Roskam (2010), p.102.

¹⁸ Harrison (2000), pp.144-5.

¹⁹ Harrison (2000), pp.136-44.

²⁰ Fletcher (2014), p. 147.

- 第一章 (I~V, 114-132) プラトンは世界を三つに分けた。一番上に住む神と一番下に住む人間は大きく隔たっている
- 第二章 (VI~X, 132-143) 間にはダイモンがいて神と人間をつないでくれている
- 第三章 (XI~XVI, 143-156) ダイモンとはどのようなものか?
- 第四章 (XVII~XX, 156-167) ソクラテスとダイモン
- 第五章 (XXI~XXIV, 167-178) 哲学のすすめ

アプレイウスはまずはじめに世界を語り、その世界の構造からして、神と人間が断絶しているわけではなく中間の場所があり、そこに人間と神との間を取り持ってくれるダイモンが住むとする。そしてそのダイモンについての詳細を語る。ここまでが、第三章までであり、全体のほぼ三分の二を成す。

主題として最後に「哲学のすすめ」が語られてはいるが²¹、それがダイモン論とは全く関係していない、というのがハリソンの意見であった。しかし、本当にそうだろうか。まずは第一章の最後のこの問いを見て頂きたい。

誰かが言うかもしれませんが、「…何をできるだろうか。もし、全体的に人間たちは不死なる神々から遠くに追い払われており、そしてこの地上という地獄に追放されていて、その結果、人々には天空の神々に対してのすべての交わりは拒絶されていて、そして天空の神々の集団のうちの誰もが人々を見に行くことがないならば。…更に、もしプラトンの見解が正しいなら、つまり、決して神は自ら人間とつながりを持たないという見解だが、石はゼウスよりも容易に私の話を聞いただろう」と (129-32)。

それまでのところでアプレイウスは、プラトンにおける自然の三区分のうち、上に住む神々と下に住む人間がどれだけ隔たっているのかを語り、そのうえでこの誰かからの問いを提示する。この問いに対して、アプレイウスは、第二章、第三章とそれに答えていくわけである。曰く、神々と我々の間にはダイモンという生き物がいて、両者を橋渡ししてくれているのだ、と。そのダイモンを詳細に語っている部分が、ハーベルミルやロスカンが、それを語ることがアプレイウスの目的であったとしているダイモン論なのである。確かに、第三章では先の疑問に答える必要以上に詳細にダイモンを分析しており、アプレイウスもその力をそこに十二分に割いていると思われる。

そして第四章は以下の文言で始まる。

²¹ ハリソンはこの作品が途中までしか残っておらず、別の終章があった可能性も考えている。

従っておどろくべきことではないか？ ソクラテスという、とりわけ完璧で、さらにはアポロンの証言によれば知者である男が、彼のその神を知るようになって尊重し、そしてその結果、彼の保護者が——ほとんどいつも一緒にいる家のルールだと私は言うだろう——妨げられるべきものすべてを妨げ、用心すべきものすべてを用心し、前もって気付かせるべきものを気付かせてくれているということは（156-7）。

ここから、ソクラテスはダイモンを視覚でもとらえていたというアプレイウスの推理を経て（ここについてはすぐあとで詳述する）、ソクラテスを高く称揚するのが第四章である。続く第五章が、「哲学のすすめ」となるわけだが、そこでアプレイウスは、その高い位置においたソクラテスを手本にして生きるべきだと説く。XXI 節の冒頭部を引用する。

どうして私たちもまた、ソクラテスの例やソクラテスに関する言及を手本にして、よりよく（自身を）高めていかないのでしょうか。そしてまた次に私達は私達自身を（ソクラテスと）同じ哲学の研究に何故ひきわたさないのでしょうか。（それに）ふさわしい諸々の神のしるし（numen）を求めながら。確かに私たちは、（ソクラテスと）同じ哲学の研究から何らかの理由で引き離されているのですが。そして、何よりも驚くのは、すべての人々ができるかぎりよく生きることを欲求していますし、魂以外のもので以って生きることはなく、あなたができるだけよく生きるためには、魂を世話するしかないということを知っているにもかかわらず、人々が自身の魂を世話していないということです。しかしもし誰かが明瞭に識別することを望むなら、眼を気かけなければいけません。それで以って対象が識別されるころの。またもしすばやく走ることを望むなら、足を気かけなければいけません。それで以って走らされるころの。同様にもし力強くこぶしで戦うことをあなたが望むなら、腕を元気に力強くしなければなりません。それで以って戦わせられるころの。同様にすべての他の身体の部分のそれぞれの部分に固有の世話がその関心に応じてあるのです。このことをすべての人が容易に見通している場合に、私は自分自身まったくもって以下のことを論理的に受け入れられませんし、事実そうあるそれを感嘆して受け入れることもできません。何故人々はまだ自身の魂をかのやり方で入念に世話をしないのかを。確かにそういった生き方はすべての人々にとって同様に必要なものですが、絵を描くやり方や豎琴を弾くやり方はそうではありません。それらのやり方によき人は誰でも何の魂の非難や不道徳や恥辱を受けることがなければ関心を持ちません（167-9）。

「かのやり方」とはすなわち哲学であり、よく生きるためには哲学で以って魂を世話して生きるしかないとの、正に「哲学のすすめ」がここには表れている。確かにこの引用部分

だけを読むと、ハリソンのように、ダイモン論とは関係がないと断じたくなる気もする。しかし、よく見ると、「ふさわしい諸々の神のしるしを求めながら」とあって、この「神のしるし (numen)」は確実にダイモンのしるしのことを言っている。そのあとで、「(ソクラテスと) 同じ哲学の研究から何らかの理由で引き離されている」とあるのは、ソクラテスのようにダイモンのしるしが私たちにはあらわれないということを表している。そして、そのしばらく後に出てくる以下の引用内の仮定された言明に注目したい。

言えるものならあなたは言うてください。「私はソクラテスやプラトンやピュタゴラスが生きたようによく生きることはできず、私は自分がよく生きることができないことを恥じていない。」まさかあなたはこれを言いたいとは思わないでしょう (169-70)。

「私はソクラテスやプラトンやピュタゴラスが生きたようによく生きることはできず、私は自分がよく生きることができないことを恥じていない」というこの仮定された言明に注目すると、正にアプレイウスがこの『ソクラテスの神について』をはじめから「哲学のすすめ」として論じていることが分かる²²。ここまでの説明から、つまり、上位の神々と下位の我々はダイモンという中間部分によってつながっていて、我々の中にもその中間部分が宿っていたり、守護霊としてその中間部分がいてくれたりするという説明を踏まえれば、「まさかあなたはこれを言いたいとは思わないでしょう」とアプレイウスは言うわけである。ソクラテスは確かに遥か高みにいるのかもしれないけれど、それはソクラテスがダイモンを正義と高潔さで崇拜し世話をしていたからなのである。そして「ダイモンの世話は哲学への誓約に他ならないのです (170)」と語っているように、中間者であるダイモンの存在をむしろ根拠にして、「ソクラテスのように哲学が出来ず、よく生きられない」のではなく「ソクラテスを目指して哲学をし、良く生きるようにすべきである」というかたちの「哲学のすすめ」をアプレイウスは行っているのだと言える。

²² ここで、「ソクラテスやプラトンやピュタゴラス」と、この三人が出てきているのは、新たに発見されたアプレイウスのテキストとして、2016年に出版された『プラトンとその教説』第三巻のとある箇所を思い起こさせる (Stover (2016))。『プラトンとその教説』第三巻の現存の部分は、『国家』の第三巻以降にはじまり、『エウテュプロン』、『メネクセノス』、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『パイドン』、『法律』、『エピノミス』、『書簡集』、『パルメニデス』、『ソピステス』、『政治家』、『ティマイオス』、『クリティアス』の短い解説ないしはアプレイウスなりの要約で出来ているのだが、『パイドン』の解説と『法律』の解説の間に、divisio librorumと名付けられた一節が入っている。「要するに特に今まで言及してきたこれらの作品の中のソクラテスの哲学の、それはつまり「真の哲学の」というのと同じなのだが、著者はプラトンであると私たちは考えてきた。他方、残りの作品の中では、他の人々の名のもとに他のやり方で議論している人々の諸々の原理が表現されているが、それにもかかわらずやはり、(これまでの作品と) 調和していることが理解される。さらに、それらの原理はピュタゴラスとパルメニデスの教説から合わせて作られたのである。また、『法律』全十三巻は、プラトン自身である登場人物によって導かれているように見受けられる (DP. III. 14. 1-6.)」。

このように流れを追って考えていくと、どうやら、ハリソンにはそうは見えなかったとしても、アプレイウスの意図としては、「哲学のすすめ」をするために、ダイモンの説明をしたと考えることが出来る。

また、アプレイウスは、フレッチャーが「アプレイウスが演じているのはプラトンの神的なメッセージを通訳する解釈者（*interpreter*）という中間者的役割なのだ²³」と分析しているように、終始プラトンの解釈者という立場を貫きながらそれを行っているようなのである。

2 プラトン解釈者としてのアプレイウス

改めて、『ソクラテスの神について』を冒頭部分から見よう。

プラトンは諸事物の全自然をそこにいるそれぞれの生き物に関して、三つに分けて、一番高位のものが神々であると述べました（114-5）。

あくまでもプラトンを解釈しての、世界の説明から始めているわけである。いわば、プラトンを代弁しているのである。次にアプレイウスは、視覚で見ることが出来る天空の神々について説明する。つまり、プラトンに従って、天体を神々とするのである（「可視的な神々と同じ部類に残りの天体もまた、プラトンと同じ考えのあなたは置きましょう（120）」）。次にさらにその上の神々について、アプレイウスはやはりプラトンを引いてきて論じる。

その神々をプラトンは体を持たず生きている自然だと見なしています。何らかの終わりも始まりもなく、前へも後ろへも永遠な自然です。物体との接触から、正にその本性上、かけ離れた自然です。完全な幸福へと向かう性向は完全で、外の善に関与することによってではなく、自らが原因で善い自然なのであり、自らにふさわしい全てのものどもへ到達できる、容易で単純で制約を受けず、完全な行動で以ってそうなのです（123）。

ハリソンはこの説は、プラトンには見られずアルキヌスの *Didaskalikos* 10 と類似していることを指摘しているが²⁴、ともあれアプレイウスが「プラトンが言っている」としているところが重要だと思われる。そしてより重要と思われるのが、その神々の創造主を語る次のくだりである。

²³ Fletcher (2014), p. 146.

²⁴ Harrison (2001), p.197, fn.12.

それらの神々の創造者、かの者は万物の支配者かつ作り手であり、被るとか行うといったどんな他者との結びつきとも無縁であり、何らかの義務に対するどんな任務も負っていないのですが、その者について話すことを、今、何故私が始めることができるのでしょうか。神のごとき雄弁を備えているプラトンが、不死なる神々にふさわしい言葉を論じつつ、たびたびその神はただ一人、信じがたく言葉にならないほどに尊厳が有り余っているが故に、人間の言葉の不正の故に、どんな弁論でも控えめにすら言い表されることはできず、賢明な男たちによって辛うじて、でも彼らが魂の活力で以って許された限りで、自分たち自身を肉体から取り去ったときに、この神の理解が、例えば非常に深い暗闇の中でかすかにきらめく白い光のように、断続的に輝くものなのだと、公表しているのにもかかわらず。勿論このことも時々しかプラトンは公表しないのですが。従って私はこの者のことを語るのをやめるつもりです。それについては私だけでなく、私のプラトんにさえどんな言葉もその大きさ（尊厳）の前では助けになることはできませんし、そして本当にそれらの事物は、私の平凡さをはるかに超えているので、私は退却のラッパを吹くつもりなのです。つまり弁論を天から地へと呼び下ろすつもりなのです（124-5）。

正に『ティマイオス』の 28C 以下が思い起こされる弁論となっている。こういったプラトンの読み、プラトン哲学の解釈から出てくる、先に引用した第一章の最後の問い、神と人間がそこまでかけ離れているのにつながりが持てるのかという問いに、プラトンを代弁して答えているのが第三章のダイモン論なのであったが、それもこのような言い方で始まっていた。

「そこまでではない」と例えばプラトンなら、彼自身の見解の為に私の声で答えるでしょう。「そこまでではないのだ」とプラトンは言っています（132）。

正にフレッチャーが指摘している通り、アプレイウスは自らの見解を語るのではなく、あくまでもプラトンの主張を代弁しているという姿勢をとる。このことは次の引用からも端的に表れている。

従ってあなた方すべては、プラトンのかの神々しい思想を私という解釈者（*interpre*s）に耳を傾けて聴いているわけですが、導かれるべきものどもや熟考すべきものどもの方へあなた方の魂を仕込みましょう（155）。

注目すべきは「私という解釈者」という文言である。ここが正にフレッチャーが注目している箇所だが、ここではっきりと、アプレイウスは自分をプラトンの「解釈者」と明言しているのである。

そしてまた、アプレイウスは、ある意味解釈者として逸脱した見解を取るときにはあえて、「私としては…思っている」という言い方をするようだ。それはXX節にある。

私としては、ソクラテスは耳だけでなく目でもまた彼自身のダイモンの諸々のしるしをとらえていたと思っていますので（166）。

確かにソクラテスが目で以ってダイモンのしるしをとらえていたというはっきりとした証拠はプラトンには見いだせないで、このような言い方をしているのだろう。またこの問題に関してはこうも言っている。

私が考えるに、あなた方のうちの多くの方々がこのちょうど今私が言ったことを信じるのは大変でしょうし、大いにおどろくでしょう。ダイモンの姿がソクラテスにはしばしばみられていたということを（166）。

何故「あなた方のうちの多くの方々が」「大いに驚く」のだろうか。おそらくそれはソクラテスがダイモンを目で見えてはいなかったという解釈が流布していたからであろう。その見解は、プルタルコス『ソクラテスのダイモニオンについて』にある。

けれどもソクラテスはしばしば、視覚像を通じて神のようなものに出会ったと主張する人たちについては、それを法螺話とみなしつつも、何らかの声を聞いたと主張する人たちには注意を向けて熱心に問い訪ねたとのことです。（Plu. *De Genio Socratis*, 588C 田中龍山訳）

アプレイウスはこの説を採っていない。どうしてその説を採らず、ソクラテスが視覚においてもダイモンを認識していたとしたかったのか。先の二つの引用の間にはこのような文言がある。

というのはしばしば、ソクラテスは声ではない神的なしるしが彼自身に現れたと公表していたからです。そのしるしはダイモン自身の外観でもあった可能性もあります。それはソクラテスだけに識別できたものだったのでしょう。ホメロスのアキレウスがアテナを識別したように（166）。

アプレイウスはホメロスにおけるオリュンポスの神々をダイモンだと解釈しており、アガメムノンに激昂するアテナをソクラテスのダイモンになぞらえている²⁵。その解釈というか思いつきを固持するためとも考えられなくもないが、その前のアプレイウスの言葉に注目したい。原文を合わせて再び引用する。

nam frequentius non vocem sed signum divinum sibi oblatum prae se ferebat. id signum potest et ipsius daemonis species fuisse,

というのはしばしば、ソクラテスは声ではない神的なしるしが彼自身に現れたと公表していたからです。そのしるしはダイモン自身の外観であった可能性もあります

ここで、「…であった可能性もあります (potest et... fuisse)」という文言が使われていることに注目したい。アプレイウスはどこにその可能性を見出したのであろうか。

プラトンのテキストに戻ると、「ダイモニオン」、「ダイモンのしるし」がプラトンのテキストの中で言及されるのは、『テアゲス』内のものも含めて九か所ある。そのうちで「声」というようにあらわされているのは、『テアゲス』を含めて三か所しかない。そしてそのうちの一か所、『パイドロス』242B-C を詳しく見てみたい。アプレイウスが、注目して引いてもきている箇所だからである²⁶。

τ □ δ α ι μ ό ν ι ό ν τ ε κ α □ τ □ ε □ ω θ □ ς σ η μ ε □ ό ν μ ο ι
γ ί γ ν ε σ θ α ι □ γ έ ν ε τ ο - □ ε □ δ έ μ ε □ π ί σ χ ε ι □ □ ν
μ έ λ λ ω π ρ ά τ τ ε ι ν - κ α ί τ ι ν α φ ω ν □ ν □ δ ο ξ α
α □ τ ό θ ε ν □ κ ο □ σ α ι ,

ダイモニオンが、いつも僕に現れるあのしるしが現れたのだ——それは常に僕を引き止める、僕が何かしようとするとき——そして、そこから、声のようなものが聞こえてきたように思われた。

おそらくアプレイウスはこの「そこから (α □ τ ό θ ε ν)」に注目して、「外観であった可能性もあります」と言っているのではないだろうか。明らかにこのプラトンのテク

²⁵ オリュンポスの神々がダイモンであるという説は、第一章で、エンニウスによる十二神を上方の不可視の神々としている記述と矛盾するようにも見える。このことからアテナの正体がダイモンと神との間で揺れているとハーベルミルは指摘している (Habermehl (1996), p.128.)。しかしアプレイウスは「ホメロスのアテナは (Homerica Minerva, DDS. 145.)」というように、ダイモンとしてのアテナを語るときには必ず「ホメロスの」という限定を設けて語っているので、揺れてもいなければ、矛盾もしていないと私は考える。ホメロスの神々は、ホメロスの作品に描かれている限りにおいて、人間に直接干渉してくる時点でダイモンなのである。

²⁶ DDS. 164.

ストからは、ここでソクラテスは声を聴く前に何らかのしるしが彼に現れているというように読める²⁷。果たして、その声を発するしるしとは何か。それは視覚的なもの以外にあり得るだろうか。そうアプレイウスは考えたに違いない。

またもう一つ、アプレイウスはソクラテスが視覚においてダイモンを認識していたことの理由を挙げている。

しかし例えばピュタゴラス派の人々は、「自分はいまだかつてダイモンを見たことがない」と誰かが言ったときは吃驚するのが普通であったと、アリストテレスは書いていますが、それは十分に信用ができると私は思います（166-7）。

ロスによるアリストテレスの断片 193 に数えられている箇所であるが、ピュタゴラス派の人間にはむしろ普通にダイモンが見えていたということを述べているわけである。そして、アプレイウスは XX 節をこう結ぶ。

しかし、もし、誰かに神々の像を観察する機会が生じ得るのならば、とりわけソクラテスにふりかかり得て当然なのです。（その人の）知の価値がソクラテスを何らかのとてもすばらしい神性と等しくしていたのですから。何故なら魂において完全に善である男以上に神に似ていて喜ばれるものはありませんし、そしてそういう男はその男自身が不死なる神々からはなれているのと同じくらい他の人間たちよりもはるかにすぐれているのですから（167）。

アプレイウスはアプレイウス自身にダイモンが見えていたようなことは言わない。その点でアプレイウスはソクラテスよりも一般の人間寄りである。ソクラテスは遥かに優れていたのだから、我々には信じがたいようなことがあっても当然ではないかという形の論証である。むしろ、アプレイウスは、ソクラテスが遥かに優れていたことの証左として、ソクラテスが視覚においてダイモンを認識していたことを考えたかったのだと推測される。先に論じたように、ここ第四章でアプレイウスはソクラテスを高く称揚しようとしているからである。

結

前述のように、『ソクラテスの神について』には、最後に伝統的で標準的な「哲学のす

²⁷ なお、 $\alpha\kappa\tau\acute{o}\theta\epsilon\nu$ を「～だけ」といった意味にとって、「まあ、声のようなものが聞こえてくるように思われるだけなのだが」といったようにも翻訳は出来るが、ここではアプレイウスがどう読んだのかを問題にしたい。

すめ」があるがそれはダイモン論とは関係がないと、そうハリソンは断じていた。しかしながら、以上のように見ていくと、ダイモン論は決して独立したものではなく、あくまでも「哲学のすすめ」をするためのものであり、『ソクラテスの神について』という作品は、そのダイモン論も含めて、全体としてアプレイウスによる「哲学のすすめ」なのだということが分かった。「私はソクラテスやプラトンやピュタゴラスが生きたようによく生きることはできないけど、私は自分がよく生きることができないことを恥じていない」というような人間に対して、それでも哲学にその人を向けるために必要なのが、中間者を語るダイモン論なのである。

また、アプレイウス自身は自分を「プラトンの解釈者」とであると明言していたわけだが、とすると、プラトンを解釈することと、哲学すること、更には哲学をすすめること、それらの関係をアプレイウスがどう考えていたのかという疑問が生じてくる。さらには、そもそもアプレイウス自身、魂の配慮はすすめるが、「プラトンを読め」というようには直接は言っていないと主張できるかもしれない。しかし、著作として『プラトンとその教説』をまとめ、人口に膾炙できるように、プラトンやアリストテレスの作品をラテン語に翻訳した男が、プラトンを読むことをすすめていなかったとは実際考えにくい。また、哲学に向かう根拠づけとなるダイモン論はプラトンの解釈から出てきているという事実は大きい。哲学を続けるためにプラトンを読むことが必要であるとは当然思っていただろう。

なお、序で長々とアプレイウスへの研究者の評価を並べたが、本発表では個別の研究者がどのような理由からアプレイウスを低く評価したのか、その理由の検討は避け、アプレイウスのテキストを読むことで、アプレイウスによる一作品をどうとらえたらよいかを検討した。結果、繰り返しになるが、アプレイウスのこの作品の根底にあるのは、プラトンのテキストを読み、それを解釈するという行為であり、その限りでプラトンに寄り添おうとする行為であった。

とにかく、アプレイウスは、『ソクラテスの神について』において、プラトンの作品、テキストを念頭に置いてそれに基づいて「哲学のすすめ」を行っており、『ソクラテスの神について』は、全体として正真正銘の「哲学のすすめ」、プロトレプティコス・ロゴスであることが分かった。またそれ、哲学をすすめることは、アプレイウスにとっては「ソクラテスやプラトンやピュタゴラスが生きたようによく生きることはできない」にしても、それを恥じてなるべくよく生きるように哲学をすること、つまりは魂とダイモン以外のものの世話をしないようにして生きること、それにつながる活動だったのである。

テキストと参考文献

De Lacy, P. H. and Einarson, B. (1959) *Plutarch's Moralia*, VII. Loeb Classical Library, Cambridge, MA: Harvard University Press. (邦訳は、田中龍山 (2008) 『プルタルコス

モラリア 7』、京都大学学術出版会)

- Haight, E. H. (1963) *Apuleius and His Influence*, New York: Cooper Square Publishers.
- Beaujeu, J. (1973) *Apulée: Opusculs philosophiques et fragments*, Paris: Les Belles Lettres.
- Dillon, J. M. (1977) *The Middle Platonists*, London: Duckworth. (reprinted with addenda 1996)
- Tatum, J. (1979) *Apuleius and The Golden Ass*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Moreschini, C. (1991) *Apuleius De Philosophia Libri*, Stuttgart and Leipzig: Teubner.
- Habermehl, P. (1996) 'Quaedam divinae mediae potestates: demonology in Apuleius' *De deo Socratis*', *Groningen Colloquia on the Novel* 7, 117-42.
- Harrison, S. J. (2000) *Apuleius: A Latin Sophist*, Oxford: Oxford University Press.
- Harrison, Hilton and Hunink (eds.) (2001) *Apuleius' Rhetorical Works*, Oxford: Oxford University Press.
- Swain, S. (2004) 'Bilingualism and biculturalism in Antonine Rome: Apuleius, Fronto, and Gellius', in Holford-Strevens, L. and Vardi, A. (eds.) *The worlds of Aulus Gellius*, Oxford: Oxford University Press, 3-40.
- 水落健治 (2006) 「アプレイウスと『命題について』」、『新プラトン主義研究』第5号、91-103頁。
- Roskam, G. (2010) 'Socrates' $\delta\alpha\iota\mu\acute{o}\nu\iota\omicron\nu$ in Maximus of Tyre, Apuleius, and Plutarch', in Frazier F. and Leão D. F. (eds.) *Tychè et Pronoia*, Coimbra: Coimbra University Press.
- Fletcher, R. (2014) *Apuleius' Platonism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Moreschini, C. (2015) *Apuleius and the Metamorphoses of Platonism*, Turnhout: Brepols Publishers.
- Stover, J. A. (2016) *A New Work by Apuleius*, Oxford: Oxford University Press.

後記

セミナー発表時に、司会の奥田和夫先生ならびに、和泉ちえ先生、一色裕先生、今井知正先生、荻野弘之先生、荻原理先生、近藤智彦先生、中畑正志先生、納富信留先生から有益なご意見、ご質問を頂戴しました。それらを活かして本文の記述に反映させたつもりではありますが、甚だ不十分で、再考すべき点はいまだ多く残っており、それらの点は今後の課題としたいと存じます。以上の先生方をはじめ、拙発表に耳を傾けていただいた会場の諸先生方にも、深く感謝申し上げたいと思います。